

松本 業治

平成七年十二月一七日 他界

享年 八十歳

おじいちゃんは

今でも私達の心の中で

生き続けています

おじいちゃんへ

松本 光樹

今年の十二月一七日が来れば、おじいちゃん
が亡くなって、ちょうど十二年になります
ね。おじいちゃんが生前関わった人達を集め
て、十三回忌をやる予定です。おじいちゃん
が亡くなって十二年経った今でも、あの時の
ことは昨日のことのように鮮明に思い出すこ
とができます。今でも私の記憶の中で、おじ
いちゃんは生き続けています。

おじいちゃんは、昔から大の酒好きであり
「のんべえ」として有名であった。戦争を経
験して、その後国鉄に戻り、秋田駅の助役に
までなった。駅長になれるだけの力があった
が、親に反対され助役止まりで終わった。お
じいちゃんを知る人は、みな口をそろえて、
優しく正義感の強い人だと言った。

私の記憶の中でのおじいちゃんは、退職し

た後のおじいちゃんであった。退職した後も規則正しく、働いていた時と同じように起き、同じ時間に朝食を摂った。昼間はよく孫の私達と遊んでくれた。私が友達を連れてきても、自分の孫のようにかわいがってくれる優しい人だった。

おじいちゃんは、私が十歳のころ胃癌になり入院した。胃を半分とり、
「お酒を三年間やめなさい。」

と医者に言われる。それから三年間、おじいちゃんは大好きなお酒を一滴たりとも口にしなかつた。周りの人達が

「少しくらいなら、飲んでもいいんじゃないか。」

と言っても、一滴たりともお酒を口にはしなかつた。おじいちゃんは、とても意思の強い人だった。酒をやめて3年間経った次の日、やっと大好きなお酒が飲める日がやってきた。その日の夕方、自分でスパーに刺身を買いにいき、一番風呂に入り、浴衣に着替え

て、居間の定位置に座り、そして日本酒を熱
燗してゆっくりと口にした。あの時のおじい
ちゃん嬉しそうな顔は、今でも忘れられな
い。そして時間をかけて、ゆっくりとお酒の
味を確かめるように味わって飲んだ。たまに
飲みすぎることはあったが、いつも決まって
2合だけ飲んだ。それから約十年、いつも決
まった時間に決まった量だけお酒を飲んだ。
そのときのおじいちゃんにとってお酒を飲む
ことが生きがいであった。
おじいちゃんが八十歳になったころ、私は
大学を卒業し、新潟で働いていた。仕事にも
慣れてきたころ、用事があり秋田へ戻った。
平成七年十一月二十四日であった。私の働い
ていた新潟県の津川町は、日本酒が有名であ
った。特に「麒麟山」というお酒は、辛口で
「のんべえ」好みのお酒であった。私はその
「麒麟山」を一本おみやげに買って、秋田へ
帰った。秋田へ着いたころ、ちようど夕方で
あった。おじいちゃんがにこにこしながら

「お帰り」

と言ってくれた。

私は「麒麟山」をテーブルの上にポンと置き
「おじいちゃん、新潟のお酒買って来たよ。
一緒に飲もう。」

と大きな声で言った。おじいちゃんは、ちよ
つと考えてからニコツと笑い

「うん、飲もう」

と言った。それから、二・三時間かけて一升
ビンを空けた。おじいちゃんは終始にこにこ
しながら、お酒を飲んでいた。そして酔う
と、いつものように戦争の話や、国鉄の話を
繰り返して話した。私はしばらく秋田から離れ
ていたから、そんな聞き飽きた話でも懐かし
く感じた。私にとって、とても楽しい一時だ
った。そして私は、新潟へ戻った。

その二週間後、秋田の実家から電話があっ
た。

「おじいちゃんが危篤だから、すぐに帰って
来い」と。

私は状況がよく呑込めなかった。二週間前に二人で楽しくお酒を飲んだことが、頭の中をちらついていた。会社に事情を話し、すぐに秋田へ帰った。実家に帰って、家族に詳しく事情を聞いた。どうも二ヶ月くらい前から調子が悪かったらしい。お酒を飲んでも、全然減っていかなかったらしい。食欲も、ほとんどなくなってきたていたらしい。そして病院から言われた精密検査も全然受けなかったらしい。一ヶ月前からは、本当に調子が悪かったらしい。く、お酒も口にはしてなかった。そんな時、何も知らない私がおじいちゃんをお酒に誘った。その時

「うん、飲もう」

と言うのに一瞬間があったのが、やっと理解できた。そのまま、弱って死んでいくより、孫とお酒を一緒に飲んで、悔いなく死んだほうがよいと判断したのか。今となっては、おじいちゃん本人にしか分からない。

次の日病院へいくと、おじいちゃんはとて

も弱っていた。声もほとんど出なかった。体も衰弱しきっていた。そんな状態にありながら、来る人に気を使っていた。今にも死にそうな人が、人に気を使っていた。私も、おじいちゃんの死を覚悟した。そして新潟へ戻った。

その一週間後の日曜日、十二月一七日におじいちゃんは帰らぬ人となった。知らせを聞いて、新潟から秋田へ帰った。冬道で、雪もけっこう降っていたから七時間くらいかかった。実家に着くと、家の前にたくさん車があった。そして座敷に呼ばれた。そこには、おじいちゃんの遺体があり、顔などを脱脂綿で拭いたりしていた。火葬の日、棺桶を霊柩車に運ぶ時、物凄く重く感じた。これがおじいちゃんの人生の重みだなって思った。火葬場で棺桶が火の中に入っていくとき、涙が溢れ出て止まらなかつた。もう本当におじいちゃんがいなくなると思い、悲しみが止まらなかつた。おじいちゃんの骨を拾っているとき、

ある人が言った。

「骨を拾ってもらっているということは、幸せなことなんだ。戦争で死んでいった者は、骨など家族に戻ってこないんだ。」と。

その日、家に帰ってから私は、おじいちゃんとの思い出の物を探した。おじいちゃんが、三年間禁酒した時に、もくもくと読んでいた「宮本武蔵」があった。その「宮本武蔵」全六巻をいつか読もうと心に決めた。そしていつも自分の近くに置いていたが、未だに読んではいない。自分が本当に辛い時きつい時、宮本武蔵のように強い意志を持てるように、じっくり読んでみたいと思う。おじいちゃんが一ページづつめくった本を、私もいつか読んでみたいと思う。あと昔、おじいちゃんはどこかに旅行に行ったときに買ってきてくれた「お守り」があった。通夜の夜中、一人仏壇の前で「お守り」を布きれにくるみ縫った。そして次の日から、必ずズボンの左ポケットに入れて持ち歩いた。何か困難なこと

があつたときに、ズボンの中で「お守り」をギユツと握り締める。そうすると不思議な力が湧いてくる感じがする。あれから十二年、いつもおじいちゃんのを感じながら生きてきた。

私は、たまに日本酒を口にする時、必ずおじいちゃんのことを思い出す。おじいちゃんにとって「最後の酒」と一緒に飲むことができて嬉しかった。おじいちゃんは死に際に、大好きなお酒をたくさん飲んで嬉しかったに違いない。おじいちゃんは、きっと自分の人生を後悔していないだろう。私も自分の人生を後悔したくないから、おじいちゃんのように、正直に、真っ直ぐに、意思を強くもつて、そして優しく生きていきたいと思う。

追伸

おじいちゃん、今年の八月二十六日に子供が
生まれました。名前は「優光」と言います。
おじいちゃんのように優しくなってもらいた
く、「優しい」という漢字をいれました。愛
情をたっぷりそそいで育てます。

平成十九年十一月二十四日

松本 光樹